

## 鍛えた金属のなかにある 3つの音を鳴り出させる

島谷 条一 「銅器・鍛金」

Shimatani Kumekazu

微妙な曲面を持つ「鏡」



(上) 金づちで底の丸みを整えていく。  
(中) 「あてがね」と呼ぶ台。これに下向きに乗せて打つ。  
(下) 炉で真っ赤になるまで焼き鈍しをする。

耳と腕と心が一体となって

形ができた鑿子は、炉で焼き鈍しをしては金づちで打つという繰り返しで形を整えられていく。  
最後に、鳴り出し(音入れ)を行う。

「甲(カン)、乙(オツ)、聞(モン)」という3つの音を調律します。カン、オツ、モンは一緒に鳴り、この順番で消えていきます」

鑿子を打つ。カンという高い音が響き、余韻が続く。じつと耳を澄ませていたかと思うと、金づちで上部内側をカンカンと打って調律する。再び、カンと鳴らす。聞く。金づちで調律する。これをずつと繰り返す。

「3つの音は、この間に必ずある。でも、どこにあるかわからない。それを、打って見つけたんです」

それを、自分の耳で聞き、腕で打つ。機械など入り込みようのない、モノと人が一体となった仕事風景がある。

「これで初めて仏具になるんですよ」  
島谷さんの鑿子は、全国各地の寺院に納められている。今日もどこかで、高く澄んだ柔らかな音を響かせている。



島谷さんの工房にある金づち。島谷さんは三代目にあたり、代々使用してきたものが他にもあるという。長いものは、中を打つ時に使うとのこと。

鑿子(けいす)とは、仏具のひとつで、読経の始まりや終わりなどに鳴らす鳴り物のこと。島谷さんは、全国でも10人に満たないといわれる鑿子職人のひとりである。  
鑿子は、細長い金属板の形の上部、中間の胴、底の3種類を合わせて作り出す。上部は「さお」と呼ばれ、金づちで打ってエッジに厚みを持たせていく。底は、丸く平らな金属板を打ち、大きな杯のような形にしていく。  
その3つをつなぎ合わせ、基本の形ができあがる。いずれも、使うのは自分で調整した金づちである。  
「金づちは、鏡のカーブが大事。平らでありながら、丸みがあるんです」  
鏡とは、打面のこと。金属に打ち当てて曲面を作るそうだが、まさに物が映りそうに輝いている。  
「使っていたら減っていく。ほんのちよつとの差で、品物に影響します」  
曲面だが、打面が「点」になっては傷が付く。その微妙な加減が鏡に求められるのだという。



島谷 条一 しまたにくめかず

昭和22年 4月11日生まれ  
昭和41年 父 条吉のもと鑿子の製作に従事する  
平成6年 伝統工芸士認定  
平成10年 手打鑿子組合会長  
現在に至る  
平成16年 高岡市美術館にて鑿子の講演をする  
日本伝統工芸士会  
会長表彰



島谷さんの工房の作品。手前左と奥が一般的な「大徳寺型」、右が内側から鑿(たがね)で打ち出した「唐様型」。